後藤　允著

尾瀬—山小屋三代の記

岩波新書

263

後藤　允著

後藤　允

1936年群馬県沼田市生まれ
慶応義塾大学経済学部卒業
現在，毎日新聞東京本社編集局勤務

尾瀬一山小屋三代の記　　岩波新書(黄版) 263

1984年4月20日　第1刷発行 ©
1984年6月1日　第2刷発行

定価 430円

著　者　後藤　允（ごとう まこと）

発行者　緑川　亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・理想社　製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　Printed in Japan

目次

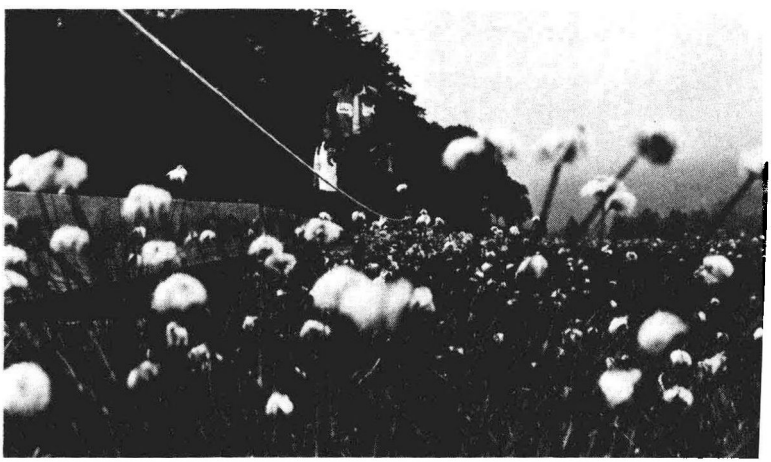
雪解けの水の中に咲く水芭蕉(平野長英氏撮影)

はじめに……1
I　尾瀬に憑かれて　——初代・長蔵……7
1　尾瀬を拓く……9
2　「一木一草を守るたたかい」……23
3　村への愛と憎しみ……43
II　「山守り」として　——二代目・長英……65
1　山の相聞歌……67
2　戦争と貧しさと……89
3　山の幸・山のひとびと……116

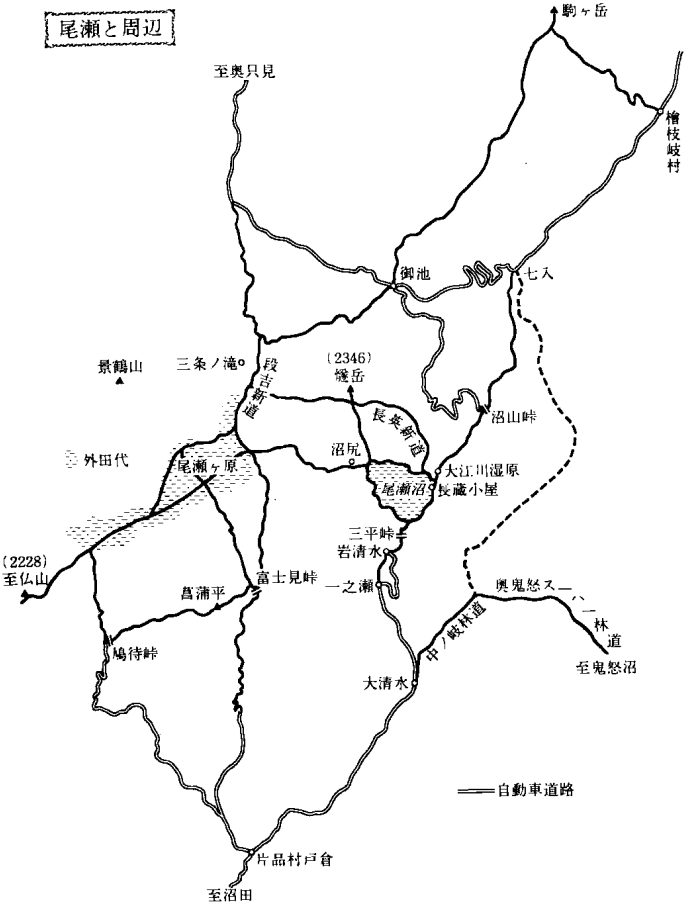
此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

Ⅲ　自然破壊とたたかって——三代目・長靖　135
1　つらい選択……137
2　「泉が涸れる」……152
後　記……183
尾瀬・長蔵小屋関係略年表……187

写真＝吉野正浩



尾瀬と周辺

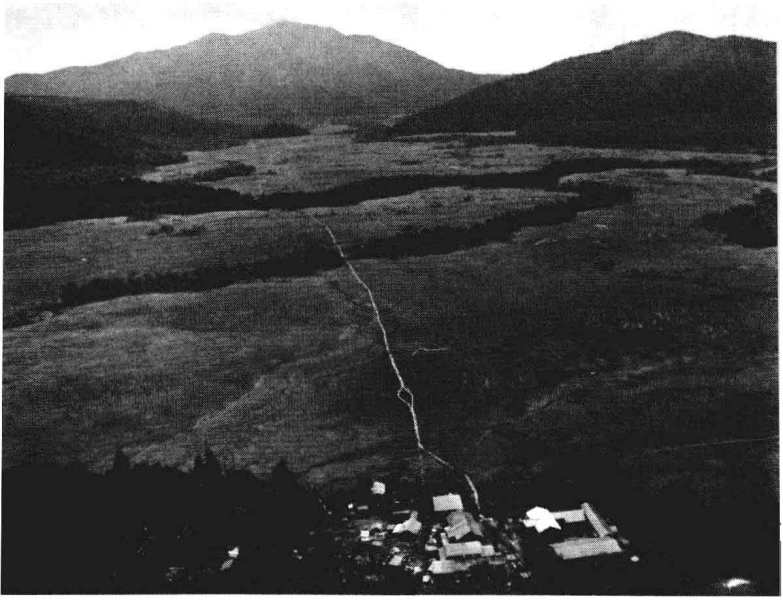

駒ヶ岳
至奥只見
檜枝岐村
御池
七入
景鶴山
三条ノ滝
段吉新道
(2346)
燧岳
長英新道
沼山峠
外田代
尾瀬ヶ原
沼尻
大江川湿原
尾瀬沼
長蔵小屋
三平峠
岩清水
(2228)
至仏山
富士見峠
一之瀬
昌蒲平
奥鬼怒ス一
一林道
至鬼怒沼
鳩待峠
中ノ岐林道
大清水
自動車道路
片品村戸倉
至沼田

はじめに

日本列島中央部の奥深い部分、群馬、新潟、福島、栃木四県が県境を接するあたりに、国立公園・尾瀬は位置する。

高山植物の宝庫として、また端正な風景の秘境として明治の中頃から注目され、多くの論文、紀行文で紹介されてきた。たとえば、日本山岳会第三代の会長であった木暮理太郎氏(明治六年十二月—昭和十九年五月)は、明治二十二年夏、初めて尾瀬を訪れているが、後に『尾瀬雑記』の中で次のように述べている。

「尾瀬は日光と共に山中の水郷である。大小幾多の池沼と湿原とが到る所に展開して、これ程水郷と呼ぶに適した場所は他に少ないであろう。むしろ水が多過ぎる位である。それが又一方に於ては特異の高原と称すべき地形を成しているから面白い。水郷であり高原であると同時に、更に之を繞って針葉樹に活葉樹を混じた大森林が発達し、背景として秀麗な燧(ひうち)岳と、雄偉



尾瀬ケ原と帯状の拠水林

な至仏山とを有するに至っては、山地水生の珍しい植物の宝庫であることを別にしても、景勝地としての尾瀬が如何に優れたものであるかを想像するに充分であろう。尾瀬は自ら二つの区域に分れている。一は尾瀬沼を中心とし、燧岳を主峰とした沼の平とも称すべきもので、一は尾瀬ケ原を中心とし、至仏山を主峰とした湿原である。（中略）かくも景勝の地である尾瀬が、日光と共に国立公園に指定されたのは、当然の事である。しかし心ある人を顰蹙せしめた尾瀬ケ原貯水池問題は、その為に首尾よく解消したとも思われないのは訝しき限りである。願くは尾瀬は有るがままの姿で保護したいもの

最初の長蔵小屋が建てられた沼尻

である。徒に外国の真似をして、池さえあればボートを浮べ、公園でさえあれば自動車道を作らなければならぬとは限るまい。（後略）」

いま尾瀬は、五月連休の水芭蕉の開花から十月中旬の紅葉の季節まで、約六十万の人たちが訪れる。山と水と、森と花と、人々は魅了されて、そして去って行く。しかし、降り積む雪の下で、永い冬に耐えなければならない人たちもいる。この尾瀬の美しく厳しい自然を生活の場として〝共生〟してきたのが、尾瀬沼畔・長蔵小屋の三代であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

初代、平野長蔵（ちょうぞう・明治三年八月―昭和五年八月）。明治二十三年、尾瀬沼西岸に小屋を建て、信仰の山としての燧岳はじめ尾瀬の開拓に努める一方、植物乱取、水力発電などの自然破壊に対し、激しく闘ってきた。その長男、長英（ちょうえい・明治三十六年五月―）も、父の遺志を継いで少年時代の入山以来、山守（やまも）りの生涯を貫こうとしている。老父の懇望を受けて入山した三代目の長靖（ちょうせい・昭和十年八月―四十六年十二月）は、尾瀬沼と燧岳を望む三平（さんぺい）峠のすぐ下まで、ミズナラ、ブナなどの自然林を切り倒し、山腹を削り、谷を土砂で埋めた自動車道建設を阻止する闘いの前面に立ち、一応その目的を達しつつも、吹雪の三平峠で凍死する悲運に遭遇した。運動に奔走するあまり、重なる疲労をおしての強行が、三十六歳の若い命を失う原因となった。

長男の長靖さんを失った時、長英さんは、こう言っている。

「失礼な言い方だが、たとえあなた方の全部が自然保護をやめられるようなことがあったとしても、私どもはやめることができないんですよ」。なぜならば「私は、尾瀬の自然の中に生きる、一個の生物にすぎないのだから」

ここには、自然に対する畏れと、自然と共に生きる一個の人間の強い意志がある。長蔵小屋三代の人たちは、自然とどう〝共生〟してきたか。

尾瀬を〝終(つい)のすみか〟とする長英、靖子さん老夫婦に、三代のいまと昔を尋ね、そして尾瀬とその周辺の地を歩いてみた。

I

尾瀬に憑かれて

——初代・長蔵——

雪解けの尾瀬沼と燧岳(平野長英氏撮影)

1　尾瀬を拓く

燈岳信仰

「父・長蔵は明治三年八月十日、福島県南会津郡檜枝岐村に生まれました。十歳の時に父親を失い、小学校は三年までしか行けませんでした。向学心の強い父は後々まで、残念だった、と言っていました。当時、正月になると軍書読みが流行して、大人の仲間に入れてもらえませんから、窓の外に立ってじっと聞いていたということです。子供心にも、父がいたならば、と思ったそうです」と長英さんは、父を語る。

檜枝岐村については後述するが、かつてここを訪れた深田久弥氏に、村人は「日本一の山奥の村落だ」と語ったという。水田を持たぬ寒冷地で、四方を山に閉じ込められた秘境であった。

長蔵さんは兄弟三人の末弟で十六歳で分家、独立して山仕事や百姓をしていた。このころ「上州の国見をする」と檜枝岐村から沼山峠を越え、尾瀬沼の東岸沿いの道を三平峠に抜けて群馬県側に出ている。この会津沼田街道は、かつて会津と上州の交易の道で、中間点の尾瀬沼畔に物資交換の小屋が設けられていたというが、長蔵さんの歩いたころは、すでに廃れていた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton